



## 「白い看護服のままで」

たけやま  
竹山 スズエ

1928年(昭和3年)  
栃木県日光市足尾町生まれ  
松江在住



### 赤紙がきて

昭和20年(1945年)3月、水戸の日赤看護婦養成所を修了して兄の家に帰ったのです。すぐに赤紙がきて、召集令状というんですか、「宇都宮にすぐに集合」といわれました。両親が宇都宮まできてくれました。水戸から実家に送った荷物を解かず洗面用具まで持って。わたしはそこから大阪海軍病院へ。もとは甲子園ホテルです。屋上にあがると甲子園球場が見えました。

空襲警報が鳴ると患者さんをおぶって地下室のほうへ逃げるんです。16歳ですよ。降りるときは夢中で降りるでしょ、「ああ大変だ」と。ところが解除になって上がってくるとき大の男の人をおぶって階段を上がるんですけど、それが辛くて。

少年航空兵が扁桃腺の手術にきたのですよ。大人の白い寝間着を着せるんです。まだ16歳だから長すぎて、肩上げと腰上げをしてあげました。「ありがとう。戦地に行く時この病院の上で手を振るからね」。それが忘れられない。

8月15日(玉音)放送を聴いて、「自分たちの力が足りませんでした。陛下に対して申し訳ない。整列。」といて、病院に入院していた兵隊を廊下にずうっと並べて、上官とか上位の兵隊が尻をべんべんと叩くのです。

病院がホテルの建物でしたから、「アメリカさんが使うから早く空けろ」とにかく「帰れ帰れ」です。入院している兵隊さんを全員帰すまで、わたしは帰れません。毎日、退院する兵隊さんに持たせるおにぎりを握っていました。

宿舎が空襲で焼けちゃったんですよ。制服も焼けてしまって、着る服がない。恥ずかしかったけど、白い看護服のまま東海道線に乗って帰ってきました。それほど寒くなかったから、11月じゃなかったかしら。



◆水戸養成所の同期生と

### 役に立ちたい

わたしは昭和3年(1928年)11月、当時としては珍しく病院で産まれました。父の仕事の関係で足尾銅山の社宅で育ちました。兄とは10歳、姉とは6歳違い。わたしはひとりっ子みたいなもの。社宅の同年齢の子たちのほうが仲良かった。広っぱがあつて遊びたいときは出てきてそこで遊ぶの。石蹴り、輪描いて片足でけんけん、お互い陣地をつくって玉ころがし。山の斜面をそりですべったり。わたしは怖がりだから、みかん箱の底に竹を割ったのを張り付けて。

小高い所に銅山の施設があるのですよ。お風呂に入って、お弁当食べて、おしゃべりして。子どもは外でトンボ取りしたり、お父さんたちは将棋指したり。そういう憩いの場があったのです。年に2回銅山祭りがあつて各職場、職場で作るんですよ。むかし話の人形ですよ。「桃太郎」だったら雉と猿と犬と、今で言ったらぬいぐるみですか、作って展示する。それを見て歩く。

夕方雨が降ったりすると傘持って父を迎えにいきました。山の途中の餅菓子屋でおまんじゅう買ってくれたりして、うれしくてね。今で言うと協同組合みたいなものかしら、「三養会」というのがあつて、そこで薪も炭も米も買う。帳面に付けて給料から引くのですよ。『少女倶楽部』とか月刊誌もありました。

銅山の小学校でしたからセーラー服の制服、「古河鉱業足尾銅山尋常高等小学校」です。町の学校は少し離れた所にありました。小学校で思い出すのは授業が始まる前に級長が「起立」「礼」「直れ」と。帰りは副級長のわたしが声かけて。先生の目の届かないちよとしたところにも気がついて、「おかあさん」と言われていました。高等小学校を出て、女学校は行かなかったのです。女学校は銅山の役員さんの子が行く。我々職工の子は高等科2年まででした。

兵隊さんが演習にきたのですよ。足尾銅山に。うちに泊まった兵隊さんが、寝るとき脱いだものをきちんと畳み、朝起きて布団をきちんと畳み、こういうきちんとした兵隊さんの役に立つことは何だろうと。それで日赤看護婦養成所を選んだわけです。



きびしかったですよ。廊下を歩く時上級生には会釈ですか、頭を下げて、そうしないと夜部屋に呼びつけられて、よく叱られましたよ。「あんた上級生に対して敬礼が足りない」。出す手紙も読まれる。来る手紙も読まれる。部屋を回って私物を点検される。

わたしたちは夜勤もやって勉強でしょ。だから眠くて眠くて。婦長の上の監督さんというのが教室にいて、こちらがうとうとクラっとすると、棒で机をコツコツ。2年間勉強して、辛いけれど、切ない思いしたけど、こういうもんだと思ってやりましたけれどね。同期は20人。途中で泣いて帰った人はいませんでした。みんな辛抱しました。2年で修了して成績順で召集令状がきました。わたしの後の人は輸送船、患者さんを運ぶ病院船に乗りました。その人とは今でも連絡を取り合っています。他の人たちがどこに召集されたかは知りません。



◆制服姿で

## 江戸川区で

あの山の中で育った人間がひよいと東京の人間になってしまいました。思いがけず長女が生まれました。10年ぶりの出産でした。

近所の病院で「看護婦募集」の貼り紙を見かけて「もう一度やってみたいな、できるかな」と思って。事務長さんが昔の軍病院に勤めていたことがあり、「日赤出身ならいいですよ」と、もう面接も何もなく採用。

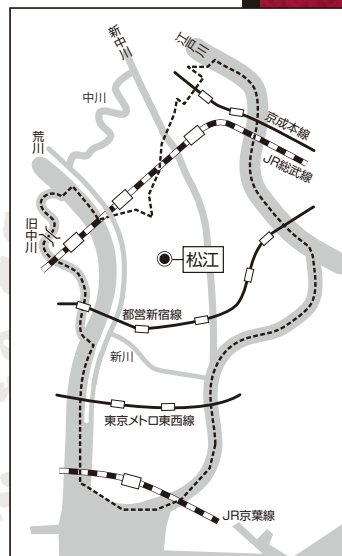
夫は厄年42歳で、あつというまでした。10月に腰が痛いと言いだして。金属の会社に勤めていて、重い製品を扱う仕事なので、そのせいかと。湿布薬を貼る程度に思っていたのですよ。朝起きて顔を見たら眼が黄色、黄疸おうだんですよ。勤めていた病院の医師に電話しました。「連れてこい、おれが診る」。そのまま入院、手術しましたが3月に亡くなりました。膵臓癌すいぞうがんだったのです。

日赤の同期生が電話かけてきて「新しい保育園ができるから、そこは8カ月児から預かるから、看護婦さんも要るから、あなたやらない」。かれこれ15年勤めました。子ども相手に気を許せなかったけど、楽しかったですよ。保母服に着替えて、お部屋行って、おかあさんから赤ちゃんの状態を聞いて、連絡帳を預かって、お昼食べさせて、ベビーバスで沐浴もくよく、お昼寝させて、2時になったら起こして、おやつ。月に1度医師がきて健康診断のお手伝い。子ども同士で手を引っ張って肩ぬいちゃうんですよ。接骨医に連れて行きましたよ。ブランコ乗っていてぶつかって、病院に連れて行ったこともあり。申し訳なかったという事故が起きなかっただけあわせて。写真とか子どもが描いた絵とか今でも取ってあります。55歳で辞めました。孫の保育ママさんが辞めたので、わたしが看ること。孫が保育園に入園後は送り迎えをしていました。

「あなた今何してるの」。前に一緒に働いていた婦長さんでした。60過ぎでしたが、総合病院に勤めることに。入院病棟にかれこれ25年。事務長さんが「看護師さんが病院で転んで骨でも折ったら話にならないからこの辺で」と。

資格があったおかげでね。ふつうの家庭だけじゃなく体験できたと思います。戦争も。身体が弱った人のころの、少しでも助けになってきたかなと。このあいだ足尾町に行ってきました。国民宿舎に泊まって、客がわたしひとりだったので、宿舎の人が廃校になった小学校まで車で連れてってくれて、懐かしかった。

わたしが保育園の仕事しているときに娘が「おかあさんの仕事しているところ見たい」というので、保育園に連れて行ったことがあるんですよ。娘は専門学校に行って卒業してからずっと保育士をしています。孫娘は医療関係の仕事です。今年の5月、わたしの生まれたところに娘を連れて行ってみようかと思っています。



## 群馬から東京へ

若かったんですね。大阪からなんとか群馬の実家にたどり着くと誰もいないんですよ。とにかく疲れて部屋でベタンと寝ていると、母が畑から帰ってきて、腰を抜かすほど驚いて「きゃああ」と言う声を出したのを覚えています。「わたしよ、わたしよ」って言って、それこそふたりで抱き合って泣いちゃいました。

太田の洋裁学校に行っ、そこを出てから町の洋服屋さんに勤めていました。洋裁と言っても仕立て直しばかりで、それこそアメリカさんの毛布を洋服に仕立てていました。昭和22年、結婚したときは数えではたちだったと思います。三つ違い。「青年会」で知り合っ、会長と副会長で今度はなにやろうあれやろうと相談しているうちに結婚することに。

館林の保健所に勤めたこともあり。妊娠するまでの短い間でしたが。保健所では健康診断、予防接種、注射したことあったかしら、医者に渡すだけね。準備して。わたし山育ちだから自転車乗れなかったんですよ。保健所だから村を回るんです。衛生状態とか、病人がでたとか。兄も山の中腹に住んでいたから自転車に乗ったことない。だからふたりして自転車押さえて乗って。兄はすぐ乗れるようになって。わたしはどうしても乗れなくて。でも乗らないわけにはいかない。ぐらぐらしながら乗りました。むこうから来た人に「朝飯食ってきたのか」大声で怒られたこともあります。

昭和24年に長男、26年に二男が生まれました。昭和34年東京に。夫が東京生まれ、江戸川に家があって、長男でしたから。わたしは群馬にいたかったんですけどね。